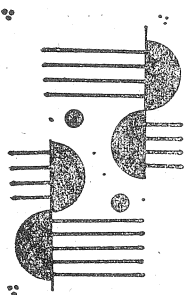


文部時報

第1170号

昭和49年11月

現代社会における日本人と文化……………安達 健二	2
▷座談会◁	
これからの国民生活と文化行政……………	10
（出席者）上坂 冬子・足立原茂徳・遠山 一行 山田智三郎・（司会）内山 正	
国土利用と文化財保護……………下河辺 淳	28
アマチュアによる文化活動……………加藤 衛	35
国民生活の変化と無形文化財の保護……………本田 安次	41
地方芸術文化行政の現状と課題……………鹿海 信也	48
<解説>	
東大寺金堂（大仏殿）の昭和大修理……………伊藤 延男	55
国立国際美術館（仮称）の設立準備……………塩津 有彦	61
<現地ルポ>	
市民と共に歩むオーケストラ……………丹羽 正明	67
〔文部省の窓〕	
昭和50年度文部省予算概算要求のあらまし……………大臣官房会計課	72
教職員任命権の行使……………初等中等教育局地方課	76
〔随想〕	
昔の大学教授……………河盛 好藏	78
〔国立青年の家紹介③〕	
国立磐梯青年の家……………斎藤慶三郎	82
〔連載第27回〕	
人物を中心とした文化郷土史 一新潟県一 ……宮 栄二	86



▷ 座談会 ◁

これからの 国民生活と文化行政

出席者

(発言順・敬称略)

上坂 冬子

(評論家)

足立原 茂徳

(厚木市助役
前神奈川県社会教育部長)

遠山 一行

(音楽評論家)

山田 智三郎

(国立西洋美術館長)

(司会)

内山 正

(文化庁次長)

内山(司会) 今日は大変御多忙のところ、文部時報のこの座談会に御出席下さいまして有難うございます。

国の文化行政を担当する文化庁が発足いたしました。六周年を迎えているわけですが、この間文化庁では、芸術文化の振興普及、伝統的な文化遺産である文化財の保護を中軸として仕事をすすめてまいりました。一方、国民生活は、いろいろな面ではげしく変化しつつあります。国民生活をより豊かなものにするためには、国や地方公共団体の文化に関する仕事も国民の暮らし方の変化に対応してゆかねばならないと思います。

今日は、評論家の上坂冬子さん、神奈川県社会教育部長を長年つとめられ昨年厚木市の助役として第一線におられる足立原茂徳さん、音楽評論家の遠山一行さん、国立西洋美術館長の山田智三郎さんに、「これからの国民生活と文化行政」というテーマで、率直な意見の交換をお願いしたいと思います。ざっくりお話をいただきたいと思いますので自由に御発言して頂きますが、上坂さんからまず口火を切ってくださいませんか。

* 厚木市の場合 *

上坂 それでは私から、厚木市の助役さんがお見えですので、お伺いしますが、厚木はだいぶ新興住宅なんかふえて、いま盛り上がりつつあるところじゃないですか。去年でしたか今年でしたか、成人式に来るようになってお伺いできなかったんですけれども、ちょっとお話いただくんです。市に対して奥様が、ああいう集まりをやってくれ、こういう集まりをやってくれという要望が多いんじゃないかね。

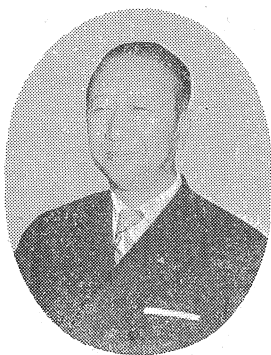
足立原 そうですね。去年の九月に人口十万人を越えて現在のところ十万五千ですから、一年で約五千人の増加となります。

上坂 若い方ばかりでしょう。



上坂冬子氏

足立原 若い層もそうですね。成人式の若者が毎年二千二、三百名です。そこで生まれて、自分のふるさとを持ちそこで成長していくのなら、そこにいわゆる文化的な面があるかもしれない。そうでない人がひょっとやって来る。しかも厚木というところは野っ原にビルが建ち、田んぼにマンションが建つというところですから、市の行政自体がそういったいろんなことに追いやられます。べつに自分のところの市長をほめるわけではありませんが、市長がずっと以前から排水、上下水道に心掛けてきた。ですからいまそういうのが建っても、すぐに困ったということはありません。しかしそういうふうなところに住み付いてくるわけでしょう。隣の人とすぐ話ができる、親しくなるということがありませんから、孤立して生活しなきゃならなくなる。それも毎日毎日ですから耐えられないと思うんですね。ですからなんとか心の安定を求めるといふことについて公民館活動が重要な役割を担っています。公民館はいま一〇館ありますので、一館が約一万人の対象人口をもつことになりました。そこには、公民館主事というのがあるんですが、私が去年の



足立原茂徳氏

十一月に厚木市に比べてびっくりしましたのは、公民館主事というのが住民の使い走りから何からみんなやるわけです。お母さん方のご用聞きをやり、お父さん方の何をやり、そして住民の文化活動の計画をたてる。全くどろまみれの状態ですね。それだけどころかいろいろなんですが……。だから国、県というような非常にきれいな、サツといくというのととはちょっと違ってるわけですね。いま悪戦苦闘の状態ですよ。

* 変わる国民生活 *

内山 最近、国民生活というのはずいぶん変化をしてくている。たとえば都市化現象とか、近代化が急速に進んでおりますね。それから一方では、テレビをはじめマスメディア

が非常な発達をしている。そうやってくると、お互いの個人生活の内容や生活様式もずいぶん変わってくるし、もう一つは週休二日制なんかも普通になってきて、余暇がずいぶんふえてきた。昔は文化というのは暇な人が暇なときに考える問題だというふうに言われていたけれども、けっしてそういうものじゃないだろと思うんです。こういうふうには国民生活が変わってくると生活の中における文化の位置というか、生活と文化とのかわり合いというのが相当変わってくるんじゃないかと思うんですよ。

上坂 変わりますよね。とくに女性の場合ですと、昔に比べて子どもの数が違いますでしょう。いま三十代のお母さんの持っている子どもの数は二・二人だそうです。そうなりますと手が余っちゃうわけですね。ですから一声二百人、二声四百人すぐ集まっちゃうんです。集まって何やるのかというと、べつにやることもわからない。それじゃ値上げ反対運動でもいこうかということになっちゃって、値上げ反対運動と自分の生活のこともやしたものの間に何かほしいと思っっているものがいま欠けているわけですね。

う困地で、そういった植物の本(季節の手帖)をお母さんたちが作ったりしました。それからまた音楽のサークルができたり、あるいは福物のグループができて、そういうのがほうぼうにできています。問題は指導者と会場とかいう点で、相当遠くへ行かなければならない。新宿から急行で五十分程度のところであっても、東京と厚木ではちょっと違いますね。すぐどこかへ教わりに行くとか、すぐにちょっとやっってくださいとは言えないですものね。いま民間で坂本さんという方が子供達に吹奏楽を積極的にやってくださっておりますが、べつにそれは市から頼んだんじゃないかって自発的にやってくださる方が出てきたんです。こうしたものを育てていくということが私たち行政の仕事だとも思いません。

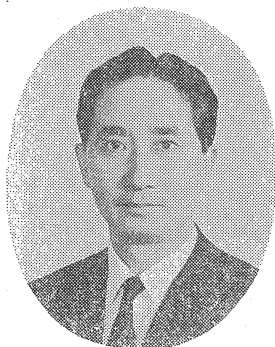
内山 山田さん、美術の分野でも最近一般の人々の関心というのは高まってきたと言えませんか。たとえばこの間のモナ・リザなんでしょうか。これはまあ特別かもしれせんけれども、百五十万の人が見に行ったと言いますね。

山田 そういうことが文化かどうか知りま

足立原 ですからそういったところで入ってくるのはエゴとイデオロギーの問題なんです。困地なんかの場合、それでこんがらがっちゃう。やはり行政が筋道を立ててくれないとね。

上坂 そうですね。もうちょっとゆったりしたものがあるよね。そういう意味では音楽なんかに関心を持つ奥様がふえているんじゃないですか。

遠山 ふえてるんだらうと思うんですけどね。これだけ学校で音楽を教えて、皆さんが知ってますからね。ぼくらの学校のころなんかはなんにも知らなかった。ただ、いま伺っていて感じたんですけど、どのまみれというのは悪いにおっしゃったのかもしれないけれども文化というのはそんな



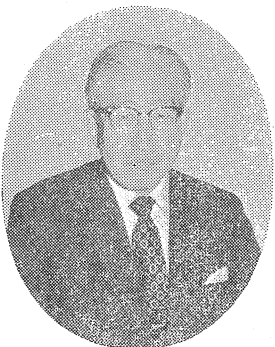
遠山 一行氏

なきれいごとじゃないはずなんですから、むしろけっこうじゃないかと思って伺っていたんですよ。国や県はスマートにいくとおっしゃったけれど……。

芽生える住民活動

遠山 国立西洋美術館の館長を前にして申し上げて悪いけれど、私は、上からレールに乗って走ってくるものが文化だとして、ところが、あまり信用できないような気がしているんです。ただいまの若い奥様方というのは、そういうふうにとこからかあたらえられるということに慣れて、こともまた事実らしいけど……。

足立原 ですから困地ができますね。その住民の融和の輪が成長していきますと、しげんに音楽のサークルができたり、植物の同好会ができていく。どこから来たか。全然町も知らない。ただお父さんが転任して来たから来たんだという人もいます。そうした人たちを見ていましてこれはいいなと思っただけ、一木一草をいとおしむ気持ち、お母さん方において近所の植物をまとめてみようかということになる。ついこの間も縁ケ丘とい



山田 智三郎氏

せんけどね(笑)。いまぼくは厚木の話を聞いていて質問したかったんですけど、そういう公民館なんかを使って、市が文化のサークルを育てる努力をしておられるのか。たとえばこういう会を作るから参加しないかとか……。困地などで好きな奥さんたちが集まって絵をかいたりするのがわりに多いんですね。そういうのを市のほうで指導しておられるんでしょうか。

必要な県と市の協調

足立原 それは市自体と、県でもやってくれているんです。たとえば県立の青少年会館というのが各市に一つずつ、いま十八県下にあるわけです。そこへは自由に人が入ってくる。青少年と名前がついているけれども子ど

もただだけじゃなくお母さんたちも朝九時から夜九時まで開いていますから、どなたもいらっしゃいと。そこでは、今日は日本史の講座、今日は編物を、今日は音楽をやっていると、いうふうには、そういうところへPRされて集まってくるわけですね。ですからそういった県のほうの動きと市とが一体になっていまして、市と県と両方で始めたらこんがらがってしまいます。

自分も県におりましたから県と市と協調してやってくれて、これはいいなという感を深くしますね。ただ市町村にとりまして——行政の面がすぐ出て申しわけないですが——文化という行政をどこで担当しているかということになると、県ですと文化課というものを作らなければならぬということに各県の教育委員会はなってきたんです。ほとんどなっているでしょう。

内山 四十七都道府県のうち四十六都道府県ができていますね。

足立原 とこが市町村へくると、文化係なんていうものはあまりないですよ。それをどこでやるのか。本来文化というものにはべつに教育委員会でなければならぬということには

ないわけです。

教育委員会で社会教育課がいまやっている。市長部局になってくるとどこということはないんですけども、お母さん方には教育委員会だの何課だの知らないわけです。市役所へとび込めばいいんですから。ですからそういったことではいま私のほうでは市民相談室というのがあります。そこへみんな集まってくる。その中でご要望にこたえるようにもっていくわけですけれど、職員自身もそれだけの素養がないとできません。ですから職員自身が勉強しなければなりません。

* 欲しい文化活動の場 *

足立原 それから施設の面では、まだ私も市では文化会館とか市民会館というものができていないんです。しかしいま促進協議会ができたところで、どこへ作ろうかとかのうも現地視察をやったわけです。二千人ぐらいの人の入る大ホールをつくる。だけど二千人ぐらいの施設があったらそれで文化はいいんだというものがありません。考えてみますと、そういったものも必要かもしれないけれども、むしろ五百人なり三百人なりといっ

たところで、自由にそういった文化活動のできる場が必要だなあとということを感じているんです。

上坂 文化というのは、なんとか教室に集まることじゃないような気がするんですけどね。

足立原 一人でもいいんですよ。

上坂 一人で西洋美術館へ見に行くほうが私は文化的だと思うんですけどね。そうなりますと、やっぱり県とか関係官庁の指導の方法がまた微妙になってきますね。

足立原 ですからいま私が集まるような施設と申し上げたのは、なにか集まらなくちゃならないということはないんです。ただ展覧会をやるにしても、絵なら絵を見る場所が必要なわけです。

内山 文部省のほうで数年前に国民の文化活動に関する調査というのをやったことがあつたんです。それに出てきた意見をまとめたところ、文化活動にあまり関係していない人たちのおもな理由は、一つは暇がないということ（これは数年前ですから、最近は大いぶかしく変わってきているかと思えます）。もう一つは手軽に利用できる施設がない。また取



内山正氏

っ掛かるきっかけがないということですね。そういう点を私どもかみしめてみると、役所や行政面でどういうことをやればいいのかという問題が出てくると思いますね。

山田 そうそう。たとえば美術の場合ですと、われわれ国の美術館の者は、いい美術を陳列して、できるだけ多くの人にそれを鑑賞していただくように努力するわけです。けれどもそれは美術の鑑賞ですから、それとは別に、そういう美術を鑑賞したりすると、こんどは自分でちょっと楽しみに描いてみたくなる。ところがそう思ってもふつうの奥さんだとなかなかきっかけがないということは、まず習うところがない。女学校とか高等学校で習ったかもしれないけれども、そんなのは忘れて、大したことはなかったから、まずど

んなふうにかいたらいいかわりたいという気持ちがある。それからもう一つは、風景なんかをかいているうちはいいけれども、静物をかいたりモデルをかいてみたいと思うと、モデルさんを一人で雇うわけにはいきませんよ。そこでどこか絵画教室みたいなところがあると、みんなが集まって一人のモデルを使ってかくとか、静物を置いてかく。やっぱり初めは先生に「ここはこうしたほうがいいだろう」ぐらい教わらないと、なかなかかけないわけですね。だからそういうきっかけを作るところが美術の場合みんなほしい。そうすると困地なんかですとこのごろはわりに美術を教える学校が多いですから、そういうところでやった連中が集まって始めると、また友達が来るというふうになりますね。けれどもふつうのところではそういうものがないから、そういう美術教室なんていうのを、ほうほうの市や町の公民館なんかで、週一回とか月に一回とかやらせるとだいたい違わうわけですよ。そうするとそこへ行ったら絵をちょっとかいてみる。初めは、かけさえてあげれば、あとは自分のうちでやってもいいわけですからね。音楽でもそうだろうと思うんですね。

遠山 音楽というのは人をじゃましないでやったり聞いたりする所がないと困る。施設はどうしてもいるんです。ただ、あんまり大きいものこしらえることはぼくは大反対なんです。大きいとそれに見合うことをやらなくちゃならない。文化っていうのはおかげさなことからはじめちゃダメなんです。ほんとうは自分のうちで音楽をやるのがいちばん望ましいんだけど、誰でもそうできるわけじゃないから……。学校なんていうのはそういうときにあまり使えないものなんです。

足立原 これからのことでしょうけど、だいたいいままで学校というのは、高等学校には美術の先生がいる、音楽の先生がいるということになりましたけど、丘の上にあつたりして、いままでなかなか通いにくいところだったんですね。最近はそのようになってきましたね。学校をそういう面で大いに活用するということはやらなきゃなりません。

山田 そうなんです。小学校でも中学校でも、放課後はみんなあいているんですよ。あれをなんとかできないものかと思うんです。文化じゃないけど、たとえば運動場もそうですよ。あれもつたいないな、と。

足立原 いまそれでうまくやっているのは兵庫県の西宮で、お母さんが朝から行けるように体育館を二階にして、二階は中学自体が使い、一階はコミュニケーションセンターとして一般の人が使えるようにしてある。

上坂 いいですね。

足立原 私は見えてきて、これはほんとうに地域総ぐるみで学校を使えると思つたですよ。

上坂 文字どおり生涯教育ですね。そうするとPTAのカンパの仕方も違ってきますね。

足立原 朝から老人やご婦人が子供と手をつないでいつでも入れる。

山田 朝からやったんじゃ、二つ場所を作らなきゃならないでしょう。お金があるから二階に造ることができたら、ぼくは放課後使ころは二階にできないから、ぼくは放課後使うといいと思う。

足立原 二つ別なものをつくるといふよりも、二階に造るとえらく安くつくんですよ。

上坂 西宮の何となくですか。

足立原 西宮市が昭和四十七年度より三年計画で市内八中学校の敷地内にこうしたコ

ミニニティセンターをつくっているのです。

遠山 西宮くらいになると、いいかもしれないけども全国の中小都市でいっぱい施設をこしらえても、できたはいいけど何やっていかさっぱりわからないと、困っているケースが大部分のようですね。大きいから困ってしまうのであって……。

足立原 大きいもの一つ作るより、いま遠山先生おっしゃったようにね。

遠山 大きい講堂だと偉い人呼んでこなきゃならないということになるし……。

足立原 私もそれ感じますね、大きい二千八入る市民会館や文化会館造るのもいいですがそこでもちゅう市民の文化活動が行われているわけではない。やっぱり三百人なり二百人なり入るといふものが……。

遠山 有名な人じゃないとだめだということになると日本中同じような人がぐるぐる回って同じことをしゃべる。

足立原 山田さんは私のほうの神奈川県近代美術館の委員なんです。ですからつねにご助言いただいているわけです。やっぱり鎌倉の近代美術館は、土方さんのような方がおられるから、東京の人までほとんど見に来ま

る。ムンク展などものすごい行列を作る。あいつた企画が非常に必要だと思うんです。鎌倉というところはあんな小さいところだと思われるかもしれませんが、やっぱりそれだけの企画が……。県民だけじゃなくてもね。見に行きたい企画を持つ。

山田 だから県の美術館で、あなたおっしゃったように、場所によってはただ造っちゃって、あとどうやっていいかわからないところがたくさんあるわけですよ。神奈川県近代美術館は、館長がいために模範的にいっているんですけども、そうでなくて、やるものがなくて困っているところがたくさんあるわけですよ。

足立原 企画はしょっちゅう当たっていませんね。この間「日本のガラス展」やったし……。近くは「近代日本の文人画展」をやるし……。

* 国の役割 *

内山 いまお話が進んでおりますが、いわゆる国民の方々が自らやる文化的な活動の拠点の問題が出てきているわけですね。もう一つの側から、とくに地方の、そういういい芸術なり文化なりに接触する機会の比較的少な

前から移動芸術祭と称して地方へ回して、いいものを鑑賞していただく機会を作っています。あるいは美術にしておくでよし、音楽なんかもその中に含めてお考えいただくというふうなことでやっているわけです。

そういう企画の面、それからその企画が実現できるようなおせん立てをするというふうなことが行政——というところ、つまり文化庁のような役所の一つの仕事ではないかというふうに考えるんです。

遠山 その点ですが、もう二年ぐらい前になりますか、新聞で鹿児島でオペラ運動をやっている方が書いた文章を見ました。文化庁がやってくれるのはありがたいけれども、たいへん迷惑の点もある。せっかく鹿児島で自分たちで自主的に始めているのに、中央からへんにうまいものが来るものだから、かえって意欲をそがれることもある。地方独自のものが育たないというのです。

内山 そういうこともあるかもしれませんがね。しかし、そういう機会に関心をもつ層が厚くなって、ひいては地方における独自の活動の成長に役立つようにということですね。

遠山 文部省がいいもの出されるのめけ

こうなんだけど、やっぱり地方で自分たちで作る方向へいってもらわないといけません。文化というのはそういうものじゃないかという気がするんです。いまミュンヘンのオペラが来てますね。最初の日にアドン・ジバンニを見てとっても感心したんですよ。むしろかなり田舎くさいんですね。いい意味でローカルなんです。オペラというのは、きれいなガラス玉みたいなものじゃなくなつて、そういうどろくさがなくちゃしょうがないんだと思いましたね。

田舎へ東京の標準版みたいなものを持って行っても、そのときは感心してもらえませんが、しれないし、オペラの好きな人が少しはふえるかもしれないけれども、どうもあんまり本質的な文化行政にはならないんじゃないかというふうな気がする（笑）。これは少し極端なことを申し上げるんですけどね。

* 地方の文化を育てる *

山田 そういうことありますね。神奈川県は実際は東京の周囲ですから、文化も東京の文化圏の一部みたいなものです。だから神奈川県独自の文化を育てるといふ努力はしな

い、そういう地域にやはりいい舞台芸術を見せ、いい音楽を聞かせ、あるいはいい美術を鑑賞できるような機会をということが、一つのポイントになるだろうと思うんです。そういう場合に、文化会館とかの施設が必要になってくるわけですね。これに対しては文化庁でも助成もしております。

そこでもお話が出ておりますように、いい施設を持っていても、その中身をどうやって盛るかということが非常に大事な問題だと思っております。まずそこでいちばん問題になるのは企画です。それから企画はしてみるけれど、それがなかなか実現が出来ないという問題があるかと思えます。そういう施設ができた場合にいちばん大事なのは、企画に当たる担当者といえますか指導者といえますか、そういう方々の問題が大事だろうと思うんです。

それから何かやろうとする場合に、それを東京なら東京から引っ張ってこれるようなおせん立てをするということも、文化庁の相当大きな仕事じゃないかということ、すでに御承知のように文化庁では東京でばかりやっていた芸術祭を地方にもということで、数年

足立原 神奈川県の場合には、絵かきさんの大家がたくさん住んでおられるんですが、十年前までは県の行政に協力してくださるというところは全然なかった。ただ住んでおられるだけで東京へみな行ってしまふ。しかし、この間なくなられた有馬さんには初めるときからご協力いただいたんですが、県の美術展をやったわけですよ。文化庁の県展の補助金もあるんですが、それは該当しない。それは神奈川県が県展をやるとなると、官製だんだんとすぐ返ってくる。ですからそのときに「どういうふうにしたらいいでしょ」と土方さんや、三上次男さん、いまなくなられたけど田さんに相談したら「美術展やれ。おれたちに任せろ」と言うんです。だから民間の県展委員会を作った。そこへ県が金を出す。お金を出すけど口出ししませんから、どうぞおや

りください、と。そうしたらそれがよくなっちゃったわけですよ。こんどいよいよ第十回展をやる。最近、展覧会の予算は一千万円近くなっていますよ。そして近代美術館や博物館が会場になる。

山田 それはいいんですけど、神奈川県の場合は他の県の見本にはならないわけですよ。東京で活躍する作家たちがたくさんいるから神奈川県あたりへ行ったら、まるでひどくなる。それでほくが地方美術館として感心しているのは、栃木県の県立美術館なんですよ。この間栃木県や茨城県、群馬県を入れた三県の連立現代美術展というのをやって、それは非常に成功しているんです。三県ぐらい一緒にするとわりあいいろいろな作家が出てくるんです。各県一つぐらいでは、地方へ行くと作家が足りないわけですね。栃木県の場合は三県連立してやりましたから、非常におもしろい現代美術展ができたんですよ。神奈川県近代美術館は企画はいいけれども、これは地方の美術館の手法にならない。つまり条件が非常にいいところにあるからです。九州あたりへ行ったら、神奈川県はまねしても

まっこないですよ。

足立原 それはできないです。ただそこいらっしやる方が東京にみんな行ってしまふ。神奈川県民は東京へ行かなければ見れないというんじゃなくて、神奈川県の中で協力をお願いだけできるようになったということが大きいことです。

山田 ということはありますね。ただ九州あたりでやったり広島あたりでやると、はるかに難しいです。

足立原 それが東京でおやりになるという場合に、神奈川県の中でどのくらい応募があるかといえば、なかなか難しいと思うんです。神奈川県美術展を近代美術館などでやってくださったので、神奈川県在住の人たちの応募が毎年千二、三百点はあるでしょう。その中で最高の大賞はこんどは二百万円ですけど、ヨーロッパへ勉強に行かせるんです。それで若手の作家の……

山田 育成にはもちろんよくて、ほかの県でもそういうことはいいですけどね。

足立原 二、三県一緒になってやるといいですね。

山田 さっきミュンヘンのオペラの話が出

ましたけれど、ドイツは一九世紀末になって

から政治的には中央集権に近くなりましたけど、文化的にはあそこは中央集権じゃないんです。ところが日本とかフランスは政治上のみならず文化的にも中央集権ですから、みんな中央へ集まってしまう。地方の文化も東京へばかり向いている。ドイツはミュンヘンでもブリュッセルでもケルンでも、各々が伝統的にその地方で育った文化を持っているし、相当の力を持っているから各々その地での芸術が育ちますね。日本も地方分権というわけにはなかなかいかないでしょうけど、各地方自体で東京のおこぼれでない文化を育てるよりに考えないとね。

遠山 そういう気分はあるんですがね。

上坂 気分というのはどういうことですか。

遠山 つまり東京ばかりが文化じゃあるまいというふうな……。非常に抽象的なものなんでしょう……。非常に抽象的なものなんでしょう……。非常に抽象的なものなんでしょう……。

みんなテレビで東京のものを見るとか、西洋のものを見るとかいうことで、自分のところで作っても始まらないという逆の気分もあるので困ってしまうんですけど……。

足立原 神奈川県に誇りに世界的な県立音楽堂がありますが、こうした大きなものではなく、この間鎌倉の能舞台を見たんですよ。ちょっと山のふもとで、それこそ二百人ぐらいしか入れない。それでちゃんとすわって見るわけですよ。それは公立じゃないんですよ。中森さんという人が先に立って法人にしてやったわけですけども、そこで能もやられる、寄席もやれる。ほかの奥さん方も使える。やっぱり市で作ったんじゃない。県で作ったのではない。そういったものが、いま遠山先生おっしゃったような気分になるといふものが案外できてくる。一つの能をやるのに入りきれないんですよ。

上坂 そういうことで言いますと、やっぱり地方の教育委員会そのものというの、あんまり頭が切り替わってないですね。というのは今年の夏なんかいい例だったんですが、私たちのところへもずいぶん夏期大学のご依頼受けるんです。それで見てみますと、「地

元にもっといい先生がいらっしゃるでしよう」と言っても、とにかく東京から呼んだということでない、住んでいる人が納得しないと言っています。そのへんのところをなんとかね……。

内山 それは上坂先生のお顔が知れているからなんですけど、マスメディアが非常に発達したということや、もう一つは先ほど山田先生のおっしゃったような中央指向型というのが抜け切れないということですね。それで先ほど遠山先生からもご批判をいただいたんですけども文化庁はいろいろいいものを地方にもって行ってお見せする機会を作るといふ仕事をやっているんですけども、これはとくにマスメディアが発達して、いわゆる複製文化、つまり間接に見るものはいっぱいあるが、生のものをじかに鑑賞するという機会が非常に少ない。したがってそういう機会をできるだけ考えましょうということなんです。それによって、地方の文化が全く均質化してしまうということを私どもはいちばん心配するわけですね。したがって文化庁でも一つの主眼として考えておられますことは、地方の文化をできるだけ育てる、高めるというこ

となんです。都市と農村、中央と地方を平準化するということよりも、もう一つポイントに考えなければならぬことは、地方で生まれた文化、地方独特の文化というもの、もっと伸びるきっかけを作らなきゃならないと思いますね。そういう点、地方での努力というものが、上坂先生おっしゃるようにもっとあっていいように思いますね。

遠山 さっきの栃木の話ですけど、似たものに群馬のオーケストラがあるんですね。群馬で始まったことだけど、最近同じような広域化というんですか、埼玉、栃木、新潟、長野と、これだけ組んだんじゃないですか。ひとまわり大きくなった。しかし東京と組むとだめだからローカルでやろうじゃないかということ、たいへん意気は盛んなんですね。難しい点はあると思いますが、もうそれが可能な条件がだいぶできてきましたね。

内山 地方の交響楽団の運営というのはなかなか大変のようですね。

最近は相当お金を出していただいているようですよ。札幌のも非常にいいようです。大阪や京都は大都会だからちょっと別ですが、足立原 いま文化庁は県にも補助金を出

し、団体に出し、文化施設にも出してますね。けれども私達の中、小の都市にはないんですね。

内山 そういう中都市に対する文化活動なり施設なり、施設の事業なりに対して、助成を広げていきたいという構想は持っているんですよ。

上坂 文化庁の管轄のほうが皆さん躍動しているんですね。文部省の直轄の婦人学級だとか教育委員会というのは相変わらずの考え方のようですね。

内山 非常に地道な、国民自らの文化活動というようなのは、やっぱり婦人団体の活動のような社会教育活動と密接不離のものだと思っんです。セクションが中央でも地方でも分かれてくると、なんとなく分離して考えられるというのは、問題だと思っんですね。そういう点は私も大いに考えなければならぬ。文化活動は、社会教育活動、あるいは婦人団体活動や青少年団体活動とはまた別だということではいけないですね。

足立原 そういうことをしたら成り立ちませんわ。

いる大家の作品を買うでしょう。その場合、あの人は作家に遠慮なく安くしてくれと言いますよ。それでいいんですよ。公共の美術館のためだから、作家は喜んで安く売っていいんですよ。ほかのところはそれを遠慮したりする。土方さんは勇敢に安くしてくださいと頼むから、あそこはわりあい安く集まっています。

足立原 どんどん集めて、それを巡回して見せる。自分のところだけで持ちぐされにするんじゃなくて。

上坂 そういうしっかりした指導者とか、ほんものを普及してくれる人が一人いると助かりますね。

遠山 美術館の連合体みたいなものがあるんですよ。

山田 あるんです。全体の会があるし、いくつかの県立美術館が集まっている会もあります。

遠山 お互いに持っているものを貸し合うというふうな……

山田 それをするほどほかの県の美術館はまだコレクションがないですね。

足立原 一つの展覧会をやるときに、鎌倉

* 地方美術館のあり方 *

上坂 文化的なものを求める気持ちと、普及させなきゃいけないという気持ちは盛り上がっているんですが、亜流文化みたいなものがすぐ出てくるような気がしますね。ほんものの文化みたいなものがストリートにいかないで……。さっきのお話で、ちょっと何とか美術を出た人が団地で絵を教えるというのは危険なことのように思っますけどね。それよりほんとの絵を一回見たほうがいいと思っんですけどね。

山田 それは見ることがいちばん大事ですからね。ですけど、なかなか東京へ来られない方があるわけですよ。そこで西洋美術館でも地方の県の美術館へ行って行って見せたいんですけど、いい美術品を、あまり動かすのはこわいわけです。非常に危険ですからね。西洋美術館では年に一回所蔵品の展示会を地方でやっていますけれど、たびたび県の美術館にお貸しすることは保存のことを考えるとできないわけです。それに、日本の人は三〇〇ページか四〇〇ページぐらいの世界の美術史に出てくるような画家の作品でないとい

い絵でないと思ったりするんですけど、そういう三〇〇ページぐらいの美術史に出て来ないような人でも、いい絵かきはたくさんいるんですよ。だからそういう人の作品を、県の美術館で買うように努力されてもけっこうだし、またそういうものなら、こちらでもお貸しすることもできるんですよ。なにか非常に偉い名まえでないといくれないという傾向があるので困るんですよ。しかしそんな有名な人なくても優れた作家はたくさんいるし、また有名な人だからといっても、できの悪い絵もたくさんありますね。

遠山 地方の美術館というのはずいぶんたくさんあるようですね。

山田 ありますね。それであいう地方の美術館は、相当購入予算を持っているところもあるし、ないところもありますね。予算を持っておられるところでは、買い方によってはいくらでも、いい絵が集まりうんですよ。これもやっぱり有名な人をねらったりするから、なかなか数が集まらないですよ。

足立原 そういう点土方さんうまいね。

山田 ええ。土方さんはうまくやっていますね。あそこは近代美術館だから、いま生きて

でやる。この次は各古屋でやる。京都でやるというふうにして……

山田 そういうふうにやっています。

ことに新聞社が間に立って、地方美術館の連合体に次から次へと、神奈川県でやった後は広島県へ持って行ったり、神戸へ持って行ったり、それはやっています。

内山 やはりいま上坂先生がおっしゃったように、それに直接当たる人に人を得るといふことがたいへん大事だと思っんです。たとえばこれも文化庁でやっている事業の一つですけれども、青少年芸術劇場というのがあります。これは先ほどの話のとおり、地方の青少年に、優れた芸術を無料で見せる機会を各県を回り持ちながらやっています。そのときにいくつか種目があります。オーケストラもあれば、バレエもあれば文楽あり能狂言がある。それを企画する地方の人々がメニューから選ぶわけです。そうすると、どうしてもオペラとかバレエとか、非常にはなやかなものか珍しいものに集中するんですね。しかしこっちで企画している文楽も能狂言も回したい。それでしづしづ引き受けたけれども、実際やってみたら子どもたちの反応とい

うのが予想外に高かった。日本の古典的な芸能を見直したというような感想が続々出てくる。やはり企画をする側に立っている人たちが、もっと広い視野で考える必要があるんじゃないかということがありますね。

* 芸術祭と芸術家 *

遠山 私うかがったことがあるんですが、絵を安く買うということに関係があるのでいっぺん申し上げたいと思っただけでも、お役所で、文化運動をやるときにいつも気になるのは、いったいだれのためにやっているかということ。芸術家のためにやっているらしくもあり、客のためにやっているらしくもあり、どっちでもなさそう、どっちでもありそうな、ああいう姿勢はまずいんじゃないかと思っ思うんですけどね。国の芸術祭についてぼくは少し強く批判したことがあるんだけど、そのときもいちばん言いたかったことはそれなんです。ぼくは芸術祭の中に入っちゃったこともあるけど、芸術家の意見ばかり聞いてやるんですね。そうすると実際は芸術家どうしの利権争いみたいなことになってしまふ。芸術家に援助してやろうとい

うなら、援助の仕方は別の方法があるんで、芸術祭はお祭りですから、国民の方へ向ったものじゃなくちゃいけない。

さっきの芸術家に絵を安く売れというみたいには芸術家には協力しろ、というべきです。その姿勢がいつでも中途はんばな気がするんです。ふだんから芸術家はなにもしていただいていないから、芸術祭みたいな格好でごまかされるんだなという気がしましてね(笑)。そういうところははっきり芸術家に協力しろとおっしゃるべきだと思っただけです。芸術家のためにふだんからもっと地道に考える。それは別のことじゃないかと思っただけです。

内山 そういふ点はたしかにあるうかと思っただけです。芸術祭は芸術家のためでもありません。遠山 あんなものは芸術家のためじゃないはずですよ。芸術家のためにあんなはでなことをやってもなんにもならないですよ。文化なんてもっとじみなものですから、じみなことやっておいて、はでなことは国民のためにやるべきであってその時には芸術家は協力しろと。そこをはっきりおっしゃるべきだと思っただけです。そこがいい加減なもんだから、絶対に国民の芸術祭とはならない。それを反省

する会合があつて行つたら、また芸術家はから呼ばれたんじやないと思つたんですけど、また結局芸術家たちが自分たちのつごうのいいことばかり言ってるんですね。あんなこと何べんやつたつて変わらないと思つたすね。どいういふ芸術祭にしたいんだと国民に聞くべきです。芸術家に聞いても全然だめですよ。みんな自分のことしか考えない。

文化財保護

内山 それも一つ頂門の一針に考えさせていただきたいと思つたす。

文化庁が所掌している仕事の中に文化財の問題があるわけなんです。文化財に関する行政というのは、いままでお話し出ておりました芸術文化とはちよつと違つて。芸術文化に関する行政というのは、先ほどから私が申し上げておきますように、芸術家なり一般の国民の方々の活動に対してバックアップするといふような立場でやるということが基本になると思つたす。文化財保護に関する行政というのは、若干それとニュアンスが違つて、非

常に管理的な仕事で、国で重要だと考えた文化財については、国が相当積極的に管理的な行政を進めるべきであると思つたす。先ほどからお話しが出ておりますように、地方の文化の根源をなすような文化財というものが地方にはたくさんある。たとえば重要な美術品ではないけれども目立たない民俗資料とか、あるいは民俗芸能であるとか、また地方にあります伝統的な工芸に関する技術であるとか、そういうものがいっぱいあると思つたす。そういうものについての行政的な配慮というものを相当やっつけていかなきゃならぬと思つたす。そういう点についてひとつお話しを出していただきたいと思つたす。

文化財の指定

足立原 いま全国で国の指定の文化財はどのくらいありますか。

内山 一万二千件くらいありますね。

足立原 県によっておつとつが相当ありますか。

内山 ええ。もちろん京都、奈良、東京あたりはいちばん多いです。法律のたてまえでは、国が指定したもので、所有者が管理を

し、修理もするといふ原則になっておりまして。それに対して国は、できるだけ補助金を与えて援助するといふことになっております。すべてそういうことは補助金によって補助事業として行われているわけです。そつちのほうはまあまあ順調に進んでいると思つたす。ただ国の指定などになつていない地方的な文化財や無形文化財がたくさんあると思つたす。

足立原 古墳などもそうですね。

内山 そしてそういうものが、案外先ほどから話の出ている、地方の文化活動あるいは文化的特色の根源をなすものが相当たくさんあるように思つたすね。音楽の面でも……遠山 さっきの地方の能なんかは指定して……

内山 これが生活の近代化、都市化現象の進むにつれて、だんだん消滅し、あるいは散逸してしまつたといふことですね。

上坂 指定というのは文化庁のほうで調査して、これは価値があるといふことを文化庁が決めるんですか。それとも地方の人たちからこういうものが大事だからと、盛り上がるんですか。

内山 文化庁が決めるという形です。もちろんこれはその地方で大事だから指定してほしいという要望はつねに出てきます。そういうものも含めて、全国的なレベルで考えて指定してあります。

後継者の養成

山田 無形文化財ですけど、いま無形文化財に指定しているのは非常に技術の高度なんですよ。名人と言いますか。あの人たちをそういうふう指定して優遇——大した優遇じゃないですが——するのもけっこうですけど、ああいう技術を習う若い人を養成する方法を考えたほうがいいと思つたす。あんなに名人にならなくつていいから、相当程度の技術を受け継いでいくような人を——なんとか経済的な援助を考えて——作ることを考える必要があると思つたす。それはいわゆる工芸品もそうですけど、もっと日常生活に密接につながつた、たとえば大工さんとか左官屋さんでもね。いまうまい大工さんというのはいないんですよ。もちろん文化庁では、宮大工などは特別に養成するようになったけど、宮大工でなくつて普通の日本の木造建築をするいい大工さんというのはいなくなつちや

つて、いま頼もうと思つても、よほどのおじいさんでなきゃいけないですよ。日本は木工の大工の技術は非常に優れておりますから、そういう技術をもつ大工さんがつづけて養成される必要があるんですけど今でもあまりないわけですよ。職業学校という職人の学校はあつたすね。あるけれども経済的な援助が十分なものから、そこへ行つても伝統的な技術はあまり覚えられない。これはほかの省が考えるべきかどうか知らないけれども、文化庁は文化庁で、あれば無形文化財の一種ですから、文化財としてこれを習う若い人を大事にする。左官屋さんもそうなんです。壁をきれいに塗る人がいまいない。そういう伝統的な技術を若い人が習つて、それが役に立つような方法を考えてやるべきだと思つたすね。たとえばある技術に達したならば、ドイツにマイスターというのがありますが、そういうタイトルをもらえるようにする。マイスターになつていけば工賃が外の工人よりも高くていいとかね。いま大工さんはまずくてもうまくても六、七千円取れるでしよう。二十五、六歳でもマイスターのような技術を保持していればそれより上、九千円は取れ

るといような制度を考えたらどうかと思うんです。ドイツには大工さんでも、しっかりと大工の人もまだ昔の技術を持っているのがときどき若い人でいますよ。昔の建築を復旧するとき、そういう人が役に立っているわけですからね。日本でもああいうことはできると思うんです。

足立原 文化庁でも後継者の養成は予算に入っているんですか。

内山 入っております。しかしそれは限られた技術ですから、もっと広く、いま山田館長のおっしゃるように、伝統的な技術を保存するという問題は懸案として検討中なんです。法律改正なんかでも考えたいと思っております。ただ今年、通産省で伝統産業に関する技術の保存を図るための法律ができました、いわば伝統的な産業技術——焼き物だとか染織だとかうるしだとかいろいろあります、そういうもののいちばんトップクラスじゃなくて、底辺を育て上げるような仕組みが一つできました。それと無形文化財のそういう技術の保存というものがうまく組み合わせ、なにかそういう面での強化ということを考えていかなければならないんじゃないか

と思っ

足立原 私も厚木で最近経験しましたのは人形浄瑠璃なんです。つい一週間くらい前に県立の厚木東高校へ行って見たんです。人形浄瑠璃をやっているわけです。ただ高校生ですから、三年間終わるとやめて、女の子ですからそのうちお嫁さんに行ってしまう。しかしあそこには相模座、林座、長谷座などが国の選択になって人形浄瑠璃の伝統があるわけです。

そういうところの中で、高等学校で人形浄瑠璃をやっている。しかもどこからも補助がないわけですね。学校の中で生徒がほんとに苦勞してやっていると、やっぱりなんとか助けるようにしていかないといけないなあと、たいへん感動しましたよ。

* 埋蔵文化財の保護 *

足立原 それから最近経験しましたのは、文化庁で文化財パトロールということで補助金を去年からでしたか今年からでしたか出している。それで県下を回ってみている。これはよいことですね。去年小学校造るのに約四千五百坪土地を九億円位だして買ったわ

です。全国にそういう遺跡は二十万か所も三十万か所もあると言われております。そういうものと開発とのからみはつねに出てくるわけです。これは文化財を担当しておられる方はたいへん苦勞されております。そのへんの行政のバランスの取り方がたいへん問題なんです。

足立原 もし、パーッと知らん顔でブルドーザーでやっ飛ばせば遺跡はなくなっちゃうわけですよ。それでやはり地方自治体でそれだけの予算を組まなきゃならない。そうすると端的に言いますと、指定されていない、いまだであるかわからないものの調査ですから国からも県からも補助金だって来ない。市単独で、市の税金でそれをやらなくちゃならない。だからどこの市町村も困るだろうなという感じを強く持ちましたね。一千何百万円もそういう調査に掛けるということは大変ですよ。

山田 そうですね。調査はもう終わったんですか。

足立原 この九月十五日で一応区切りはつけて、そこところは学校を造るようになって、と。しかし調査団では全部終わらない

と言っ

と言うんです。今年の暮れから来年の春、学生の休むときにまたやらなくちゃ全部終わらないと言っ

それからまた最近、私は福井さんという方が書かれた八咫のふるさとVという本を読んだんです。そこは厚木からちょっと離れたお寺の和尚さんなんです。自分のお寺を会場にして、その方が文化的な素養のある方だからでしょうけど、そこで檀家の人たちに文化財などのけいもうをしておられる。それもべつ

けです。昭和五十年の四月に開校ということ校舎を建てようと思いましたが、埋蔵文化財があると言っ

上坂 何が出てきたんですか。

足立原 住居址が四五か所も出てきた。それから神奈川県内では珍しい二重になった高坏(たかつき)が出てきた。これは大変だということ、市ではいまだかつてない文化財の発掘調査費というのを一千二百万円投じて、この夏休み中掛かって、日野先生を団長として調査した。その間工事をストップしなければなら

内山 結局いまお話が出ていますように、最近文化財の問題でいちばん深刻な問題は、そういう土地の中に埋まっている埋蔵文化財

に町から補助金が出ているわけではないでしょう。そこで自力で、あるいは檀家のそういう理解があるから……やはりそういうものも文化財を愛するという思想のけいもうには隠れたそういう人たちがいる。そういう人たちを発掘して、地方自治体が応援していかないといかんじゃないかなということが最近感じたことです。

内山 文化財の問題は行政の役割が相当大きいですけども、やっぱり国民の一人一人が、文化財の問題も文化の問題であるという認識に立って、これを大事にするという気持ちになっていただかなければどうにもならん問題だと思っ

* 結 び *

だいぶ時間がたちましたが、最後に何か一言ずつ提言をいたしませんか。

上坂 私は文化財とか芸術方面はあまりあれがないんですけど、私がいちばん接触するのは教育委員会の社会教育課の方なんです。教育委員会の方にはあんまり中央に目を向け

ないで、土着の文化の中から何かいいものをね。たとえば夏期大学にしても文化の日にしても、とにかく中央から先生呼んで来るというんじゃないくて、地元の人の中でいい話を発掘していくという、だれに何を話させるかという、ところを検討するのが教育委員会の役割だと思っんですね。そんなところで、ちょっと東京のほうに目が向きすぎているんじゃないかという気がいたします。そのへんのところを目を足元に向けていただきたいですね。

山田 いまも地方の方々の目が中央に向きすぎているというお話がありましたけれど、ぼくも、どうも日本は地方文化の育成というか、文化は自分たちの手で独自に育てていくものだという気持ちが足りないと思っんですね。だからそういう気分を醸成するような文化行政が必要だというふうに考えています。

遠山 さっきも申し上げましたが、私も全く同じですね。ことに西洋音楽なんていうのは、どこか外にほんものがありそうだという気分にはかりなっていますから、そんなものじゃないんだということはお役所のほうでも皆さんに考えていただきたい。やはり地方で

生むものじゃないとだめですね。パリもミュンヘンもみんなローカルです。東京だけが中心というのは何とおかしい。

足立原 小林秀雄さんが歴史を感じる心が大事だ」とどこかで話されたのが耳に残っているんですが、やっぱり文化という問題はこうした人間としての態度が大切だと思うんです。文化は、手の届かないところにある問題じゃない。あるいはえらい絵をかくことでもない。えらい音楽の大家を夢見るといったことではない。さっき遠山さんもおっしゃったどろくさいんでいいんだ、と。そういった中で、文化行政に携わる者が、謙虚にそして市民と一緒に勉強していかなければいけないと思っんですね。そうでないといつこれ企画し、あれ企画し、とやりたがるようになるんです。そういうもののじゃなくて、ほんとに市民の気持ち、市民の心に、根ざすもの、それがほんとに自分の生活をどういうようにしていくか。自然な心情を耕していくふん囲気だけでも醸成されていくなら私はけっこうじゃないかと思っんですね。そういうことに目を向けて、自治体のそういう行政に携わる人が、ほんとに謙虚に必死に勉強して先達とな

ってやってもらいたいということです。

上坂 私もケチばかり付けましたので最後におだてますと、このごろ奥様相手などで生涯教育のまやかしの学校がずいぶんできていますね。学校法人じゃなくて、主婦の何とかスクールとか、カルチュア・スクールとかですね。そういうところの中をのぞいて見ると、ほんとに講師の先生いい加減ですね。りっぱな先生は名前だけで、行って見るとほんとにそのへんの人集めてきたみたいなんです。それと比べると、公民館活動なんていうのは、まじめな先生が本気で取り組んでいますね。そのへんはほんとに文部省の社会教育課の活動に頭が下がります。けれども最後におだてすぎちゃいけませんのでケチ付けますと、こちにほんものがあるって、こちにまやかしかあるという場合に、一般の人の目はどっちに向くかという、やっぱりはでなほうに向くわけです。みんなまやかしかだけのにぎやかなほうに行ってしまう中で、ただどろくささだけでは売物にならないというところもひとつ検討しながら、どろくさを大事にしてもらいたいと思っんですね。

山田 まやかしといえば、美術のほうで言

いますと、工芸品でも家具でも何でも、非常にはでなげたく品ばかり売れるんですよ。商売人はそのほうがもうかりますから、本当には美しくなくても、はででちょっと、見のいいものばかり売れる。台所用品でもそうですよ。やたらに花が付いたりなんかしているお鍋類が売れたりする。県の美術館や国の美術館でも、私のほうは西洋美術館ですからそういうことでできないんですけれども、美しい生活を作る展覧会というような、ほんとの美しさというものは、もっと自然の材料美とか、簡素でも洗練された形式のなかにあるんだということを教育する展覧会も必要だと思っんですね。

遠山 これはちょっと別の話ですが、これは私どもも悪いんですけれども、いま楽壇ではでに活躍している人の音楽というのにはだめですね。これは日本だけじゃない。どうも世界的におかしくなっちゃったので……。カラヤンなんかいちゃいちゃ例だと思っんですね。カラヤンはべつに才能ないというのじゃないけど、やっぱりおかしいところあるんです。世界一といわれればくっついてゆくお客さんにももちろん問題がありますけどね。あ

んまりはでに出て来ないで、四十ぐらいになって子どもも大きくなったから、一生懸命勉強したものをやりましようといっておやりになるような方を聴いたらとてもいい音楽をやっているんですね。そういうことは新聞にも出ないんだけど……。新聞はどうしても大家と新人ばかり追かける。

上坂 結局ほんものを見る目というのが私たちにないんですね。そういうことで言いますと私いまでもはっきり覚えているんですけど、水戸に女子高校でかなり程度の高い高校があるんです。そこに二年ぐらい前ですけど話をするように言われて行ったんですが、そのときは講演を聞いた感想集も送ってくれたんです。一、二枚めくったら、たいへんため

になった。おもしろかった。一時間半全然あきなかったというのがあるんです。それで五、六枚めくったら「話はおもしろかったけど、内容が薄すぎた。なにも東京からあの人をわざわざ呼ばなくても、地元がいい人がいるんじゃないか」と高校生が書いてある。私はいこれだ！と思っその子に「おっしゃるとおりです」と返事書きましたね。やっぱりああいいう子どもの見る目というのは大事にした

いなあと思っましたね。

内山 そろそろ時間がまいりましたので、このへんで座談会を結ばせていただきました。と思いますが、先生方からたいへん示唆に富んだご意見やご提言をいただきました。ありがとうございます。司会がまずいために十分におっしゃっていただけなくて、たいへん失礼をいたしました。私どもの文化庁でやっております行政についても、芸術文化に関する国民の水準を高めていかなければなりませんけれども、同時に独特な文化というものをつねに見失わない。むしろそれを育てるといふ観念に立って事を進めていくことを心掛けなければならぬと感じたわけですね。今日はどうもありがとうございました。

編 集 後 記

◇戦後我が国は、文化国家として再出発してから三十年になりましたが、戦後の荒廢した国民の精神生活に潤いを取りもどそうと、昭和二十一年に第一回の芸術祭が開催されて、今年で二十九回を迎えました。その間高度経済成長に伴って文芸復興、多彩の芸術開花をもたらしました。しかしながら、最近の列島改造ブームで埋蔵文化財などが乱掘の危機にさらされておりますが、先人の残した尊い文化遺産を後世に残すとともに、十一月三日「文化の日」をは、なおいっそう国民各自が文化財愛護の自覚の精神を高めることが、文化国家の理念ではないでしょうか。

◇本号は文化の振興について特集しました。巻頭では安達文化庁長官に現代社会における日本人と文化と題して論じていただきました。座談会では、これからの国民生活と文化行政と題し、文化活動施設、地方文化育成、行政の役割などを話し合っていました。また国土利用と文化財保護を下河辺局長に、アマチュアによる文化活動を加藤先生に、国民生活の変化と無形文化財の保護を本田先生に、それぞれ述べていただきました。

MEJ 5170 月刊 「文部時報」 11月号 第1170号

著作権 所有	文 部 省	昭和49年11月5日 印刷 昭和49年11月10日 発行
発行所	株式会社きょうせい (帝国地方行政学会)	定価 130円 (〒20円)
本 社	東京都中央区銀座7丁目4番12号 (郵便番号 104)	年間購読料 1560円 (〒共)
(営業所)	東京都新宿区西五軒町52番地 (郵便番号 162)	* ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を 申し受けます
電話	東京 (268) 2141 (代表) 振替口座 東京 161番	* なお、購読の申し込みは、直接営業所または よりの書店をお願いします
印刷所	株式会社 行政学会印刷所	